大学生を対象とした授業満足度の高い授業に影響を与える要因の検討

――授業評価アンケートを用いて――

山　田　洋　平
桑　畑　洋一郎

問題・目的

本学では，FD 活動の一環として，学生による授業評価アンケートを実施している。2015 年度前期は，中間アンケート（6月）と期末アンケート（7月）が行われた。FD（Faculty Development）とは，「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」（中央教育審議会，2005）であり，大学の教育理念や目標を実現するために必要な教員団の資質改善および資質開発を目指した取組である（有本，2005)。学生による授業評価は，授業の実態を把握するアセスメントに用いられる FD 活動の1つとして重要な活動である（絹川・舘，2004)。本学においても，実施した授業評価アンケートの結果を活用して，授業内容や方法の改善を図っている。

2015 年度，本学で実施された授業評価アンケートは，授業全体の満足度，学生の関心を高めるための工夫，授業のレベル，進行速度といった授業に関する質問の他に，学生の予習・復習の時間や学生自身の学びの態度といった受講する学生に関する質問など様々な側面についての質問で構成されており，回答形式も選択肢形式と自由記述形式が用いられている（表 1)。

授業評価アンケート結果の活用方法は，a）授業評価アンケートの結果から算出される担当授業ごとの各質問項目の平均得点と大学全体の平均得点との比較と，b）自由記述による意見・感想の検討の 2 種類である。大学教員は，これらの情報から担当授業の成果と課題を明らかにし，学生の授業満足度のさらなる向上をめざした授業改善を行うこととなる。

本学では，授業内容や方法の改善方針については，授業担当の大学教員に委ねられている。しかし，どのように授業改善を行えばよいのか困惑する教員も少なくないのではないだろうか。その理由として，学生のニーズ調査が行われていないことが挙げられる。学生がどのような授業を求めているか，あるいは，どのような授業を行えば学生が満足するのかが分からないと，授業満足度を低下させる授業改善が行われる可能性も考えられる。反対に，学生の満足度が高い授業がどのような授業なのかが把握できると，的確な授業改善が行われやすくなる。

そこで本研究では，学生の授業満足度に影響を与える要因について検討することを目的とす

る。その際，詳細な学生の意見や考えを分析するため，選択肢形式の質問による量的な検討と自由記述形式の質問による質的な検討の 2 つの研究を行う。なお，本研究で用いる学生の授業満足度は，表 1 の質問 2 に該当する項目であり，本研究においては“授業を受けて良かったかどうかという学生の主観的な満足感の程度”と定義する。

表 1　授業評価アンケートの質問項目

質問番号	キーワード	質問内容
質問 1　Q1	中間アンケートの反映	中間アンケートの結果がこの授業に反映していると思いますか？
質問 2　Q2	授業満足度	この授業を受けて良かったと思いますか？
質問 3　Q3	Q2 の肯定的評価の理由	上記 Q2 で "a" を選んだ理由を具体的に答えて下さい。
質問 4　Q4	Q2 の否定的評価の理由	上記 Q2 で "d" を選んだ理由を答えて下さい。（複数回答可）
質問 5　Q4-1	Q4 のその他の理由	Q4 で "e. その他 " その他を選択した人はその理由を教えてください
質問 6　Q5	関心を高める工夫	学生の関心を高める「工夫」(AV 機器の使用やプリントほか) がなされていましたか？
質問 7　Q6	分かりやすさ	この授業はわかりやすい（適切なレベル）と感じますか？
質問 8　Q7	進行速度	この授業の進行速度は適切でしたか？
質問 9　Q8	科目名との対応	「科目名」に応じた授業内容でしたか？
質問10　Q9	シラバスとの対応	シラバスは授業内容を把握するための目安になりましたか？
質問11　Q10	授業の準備	授業の準備は十分になされていると感じましたか？
質問12　Q11	新たな知見の獲得	この授業で得られた「新たな発見（知見）」がありますか？
質問13　Q12	Q11 の具体的回答	上記 Q11 で "a" や "b" を選んだ「新たな発見」とは何ですか？
質問14　Q13	教員の熱意	この授業に対する教員の熱意を感じましたか？
質問15　Q14	教員とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ	この授業で教員とのコミュニケーションや意見交換がしやすいと感じましたか？
質問16　Q15	将来との関連づけ	この授業は何らかの点で「将来」のために有意義だと感じましたか？
質問17　Q16	教育環境	授業の教育環境（教室・設備など）に満足できましたか？
質問18　Q17	Q16 の否定的評価の理由	上記 Q16 で "c" や "d" を選んだ理由を具体的に答えて下さい。
質問19　Q18	予習・復習の時間	この授業についてどのくらい予習や復習をしましたか？
質問20　Q19	学びの態度	この授業でのあなたの学びの態度をあらためて採点すると何点ほどですか？（100 点満点）
質問21　Q20	授業採点	この授業をあらためて採点するとしたら何点ほどですか？（100 点満点）
質問22　Q21	授業への意見・感想	この授業に対して全体的に感じたことや改善点を具体的に述べてください。

研究 1：選択肢形式の質問に関する分析

目的

研究 1 の目的は，選択肢形式の質問を用いて，学生の授業満足度に影響を与える要因について検討することである。

方法

調査対象者：本学全学生延べ 4,193 名（文学部延べ 2,176 名，子ども学部延べ 2,017 名：学生は受講した授業全てにそれぞれ回答した）

調査内容：「2015 年度前期授業評価アンケート」22 項目。本アンケートは，本学で 2014 年度に実施した授業評価アンケートを元に授業評価委員会等が中心に作成したものである。選択肢形式については 4 件法（複数回答可の質問 1 問を含む）により回答を求めた。自由記述形式については，質問に対して自由な回答を求めた。

調査時期：2015 年 7 月 13 日から同年 7 月 31 日

調査方法：各授業時間内に 10 ～ 15 分程度の時間を確保し，授業評価アンケートを実施した。調査対象者はスマートフォン等を用いて学内のアンケートページにアクセスし，回答した。スマートフォンを持たない者については，アンケート用紙を配布・記入し，その後アンケートページへの入力を依頼した。

結果

調査対象者のうち，選択肢回答に欠損のなかった 3,974 名（文学部 2,072 名，子ども学部 1,902 名）が分析対象者となった。

授業満足度に影響を与える要因について検討するため，大学全体と学部ごとに重回帰分析を行った。方法は，授業全体の満足度（授業満足度）を尋ねている質問 2 を従属変数，本アンケートの選択肢形式の質問のうち，授業と関連する質問（質問 6 ～ 12，14 ～ 17，19）を独立変数とした重回帰分析である。結果を表 2 に示す。

表 2　大学全体と学部ごとの重回帰分析の結果

		大学 n=3,974	文学部 n=2,072	子ども学部 n=1,902
質問6	関心を高める工夫	.07 ***	.09 ***	
質問7	分かりやすさ	.13 ***	.07 ***	.21 ***
質問8	進行速度			
質問9	科目名との対応			
質問10	シラバスとの対応			
質問11	授業の準備			-.06 *
質問12	新たな知見の獲得	.38	.31	.37
質問14	教員の熱意	.04 **	.05 *	
質問15	教員とのコミュニケーション	.06 ***	.09 ***	
質問16	将来との関連づけ	.20	.20	.19
質問17	教育環境	.03 *		.04 *
質問19	予習・復習の時間	.04 ***	.03 *	.05 **
Adjusted R^2		.61	.61	.63

*** p<.001, ** p<.01, * p<.01

授業満足度に影響を与える要因のうち標準偏回帰係数（β）の値が .20 より大きい要因を挙げると，大学全体においては，質問 12「新たな知見の獲得」と質問 16「将来との関連づけ」から授業満足度に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。次に，学部ごとの検討において，文学部では大学全体度同様に，質問 12「新たな知見の獲得」と質問 16「将来との関連づけ」から授業満足度に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。一方，子ども学部では，質問 12「新たな知見の獲得」と質問 16「将来との関連づけ」に加えて，質問 7「分かりやすさ」から授業満足

度に対する正の標準偏回帰係数が有意であった。

この結果から，学生が新たな知見を得られると感じられ，将来に役立つと感じられる授業であるほど，授業満足度が高くなることが明らかとなった。子ども学部においては，これら2要因に加えて，分かりやすいと感じられる授業であるほど，授業満足度が高いことが明らかとなった。

一方で，教育方法に関する項目（質問6「関心を高める工夫」，質問8「進行速度」，質問11「授業の準備」）や科目名やシラバスとの対応に関する項目（質問9，10），教員自身に関する項目（質問14，15）が授業満足度に与える影響は小さいことが示された。

考察

研究1では，選択肢形式の質問を用いて，授業満足度に影響を与える要因について検討した。その結果，大学全体および文学部の学生の授業満足度に影響を与える要因は，“新たな知見が獲得できること”，“将来に役立つと実感できること”の2つであることが示された。また，子ども学部の学生にとっては，上記の2つに“分かりやすいこと”を加えた3つが授業満足度に影響を与える要因であることが示された。これらは授業改善において，①新たな知見を提供できているか，②学生の将来との関連づけが授業を通して行えているかという点，加えて，③そのような説明が分かりやすく学生に伝わっているかという点に注意する重要性を示している。なお，アンケート項目の変更により，今回の結果とは異なる要因が見出される可能性があることを付記しておく。

研究2：自由記述形式の質問に関する分析

目的

研究2の目的は，自由記述形式の質問を用いて，学生の授業満足度に影響を与える要因について検討することである。これにより，学生が授業に対してどのような評価を行っているのか，選択肢形式の質問による分析とは異なる深度で探っていくこととしたい。このことは，直接個々の授業改善のヒントが得られることに加え，学生が大学生活を送る上で特に授業に対してどのような意味付与を行っているか探ることにもつながり，意義深いと思われる。

方法

研究1と同様

結果

KH coder（樋口，2015）を用いて分析を行った。本ソフトは，文章を単語レベルに分解し，単語の出現回数や単語同士の共起のあり方を探ることが可能なソフトである。

自由記述形式で回答する質問 3，5，13，18，22 のそれぞれについて，順に頻出単語の集計と単語同士の共起を見ながら，大学生活における学生の意味世界を探った。

1. 質問 3 の結果

質問 3 は，質問 2 でこの授業を受けて良かったと「大いに思う」と答えた回答者に，その理由を問う設問である。記述結果を単語レベルに分解したところ，総出現語数は 13552 語で，異なり語数は 1393 語であった。まずは頻出語を見てみたい。

表 3　質問 3 の頻出語（上位 150 語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
楽しい	105	試験	16	作品	9
学べる	98	新しい	16	使える	9
学ぶ	96	増える	16	情報	9
授業	92	感じる	15	心構え	9
知る	88	教員	15	新た	9
知れる	58	好き	15	多く	9
知識	57	体験	15	中国語	9
子ども	55	発表	15	読む	9
英語	50	学び	14	話	9
先生	50	関わる	14	スポーツ	8
実習	49	現場	14	絵本	8
分かる	49	仕方	14	関係	8
思う	47	司書	14	経験	8
自分	47	社会	14	思える	8
将来	47	弾ける	14	就職	8
教育	44	丁寧	14	準備	8
勉強	44	難しい	14	深める	8
指導	42	表現	14	日本	8
教える	41	活動	13	文化	8
ピアノ	38	大切	13	文章	8
内容	36	方法	13	聞く	8
実際	32	協力	12	力	8
出来る	30	研究	12	歴史	8
たくさん	29	向ける	12	わらべ	7
必要	29	採用	12	ポイント	7
面白い	29	施設	12	技術	7
役立つ	29	心理	12	古典	7
多い	28	前	12	使い方	7
詳しい	27	対策	12	資格	7
考える	26	日本語	12	事例	7

役に立つ	26	文法	12	障害	7
書き方	23	問題	12	上がる	7
文学	23	苦手	11	上達	7
身	22	参考	11	色々	7
様々	22	自然	11	図書館	7
理解	22	触れる	11	専門	7
良い	22	世界	11	特に	7
韓国	21	他	11	描く	7
人	21	パソコン	10	模擬	7
得る	21	レジュメ	10	話す	7
興味	20	基礎	10	アドバイス	6
少し	20	具体	10	グループ	6
機会	19	経済	10	違う	6
説明	19	いろいろ	9	会話	6
受ける	18	コミュニケーション	9	改めて	6
深い	18	演劇	9	学習	6
保育	18	絵	9	学生	6
実践	17	基本	9	教諭	6
考え方	16	見る	9	言葉	6
今	16	考え	9	高める	6

以上のように，「楽しい」「学べる」「学ぶ」「知る」「知れる」「分かる」など，知的好奇心を満たしてくれる授業であることを理由に挙げる際に用いられる単語が多いことが分かる。また，「子ども」「実習」「将来」など，今後の人生や将来において意義深いと学生が意味づけている授業を肯定的に捉えている単語も頻出している。

さて，以上の単語群を元に，若干のコーディングを行いながら共起ネットワークを描くと以下のように図示される[1]。コーディングは，「将来」「職業」と「教師」の一部と「先生」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【職業】とし，「採用試験」「就活」「就職」を【就職】とし，「教授」「教師」の一部と「先生」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【教員】とし，「児童」「子ども」「幼児」「乳児」と「生徒」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【子ども】とした。つまりは、同様の意味内容を含む単語を、一つのコードとしてグルーピングすることをコーディングという。結果は以下の通りである。

この図１から読み取れるのは，【就職】への「対策」や【職業】に対して「必要」となる「知識」が「増える」こと，あるいは，「教育」「現場」【子ども】など，将来に関わることに「実際」に結びついた授業に対して，学生たちが魅力を感じているという解釈である。以上より，将来に直結するような実践的授業が学生の満足度向上につながることがうかがえる。

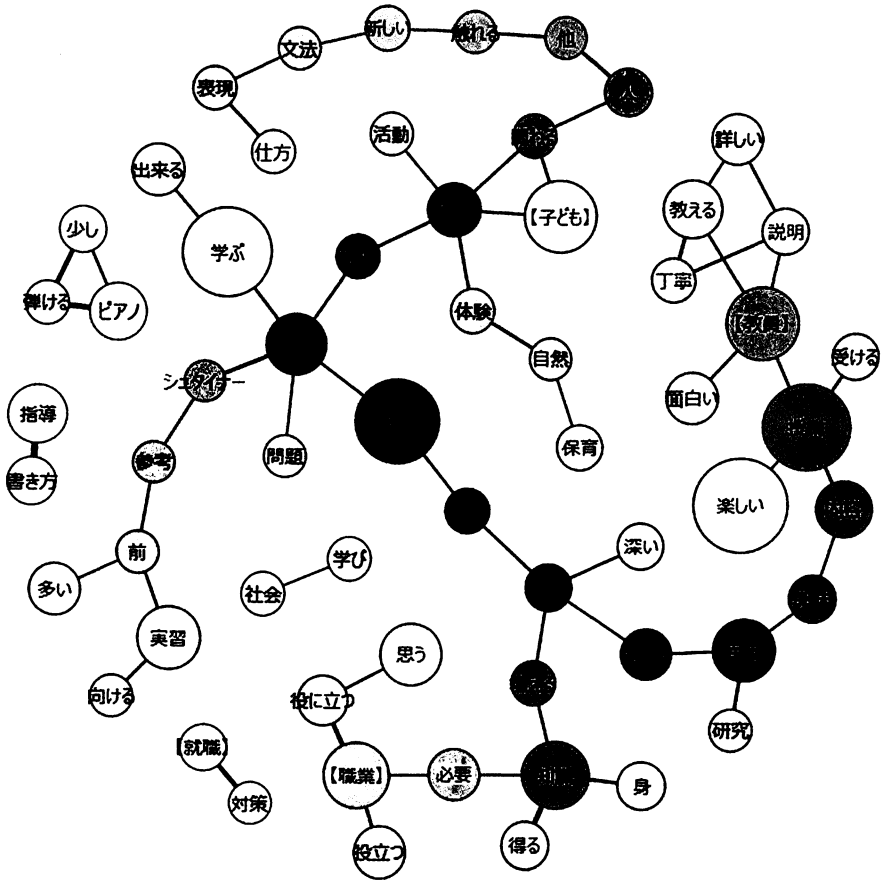

図 1　質問 3 の共起ネットワーク（Jaccard 係数が最も低い共起で 0.072）

2. 質問 5 の結果

質問 5 は，質問 2 でこの授業を受けてよかったと「まったく思わないと答えた回答者に，その理由を問う設問である。総出現語数は 296 語で異なり語数は 124 語であった。頻出語は以下の通りである。そもそも回答者数が少ないので参考に留まる程度ではあろうが，「授業」の「意味」に関わる部分が授業の評価を否定的なものにする方向に作用していると思われる。

表 4　質問 5 の頻出語（2 回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	9	興味	2	内容	2
意味	5	個人	2	話	2
自分	3	思う	2	話せる	2
人	3	自己	2		
意見	2	多い	2		

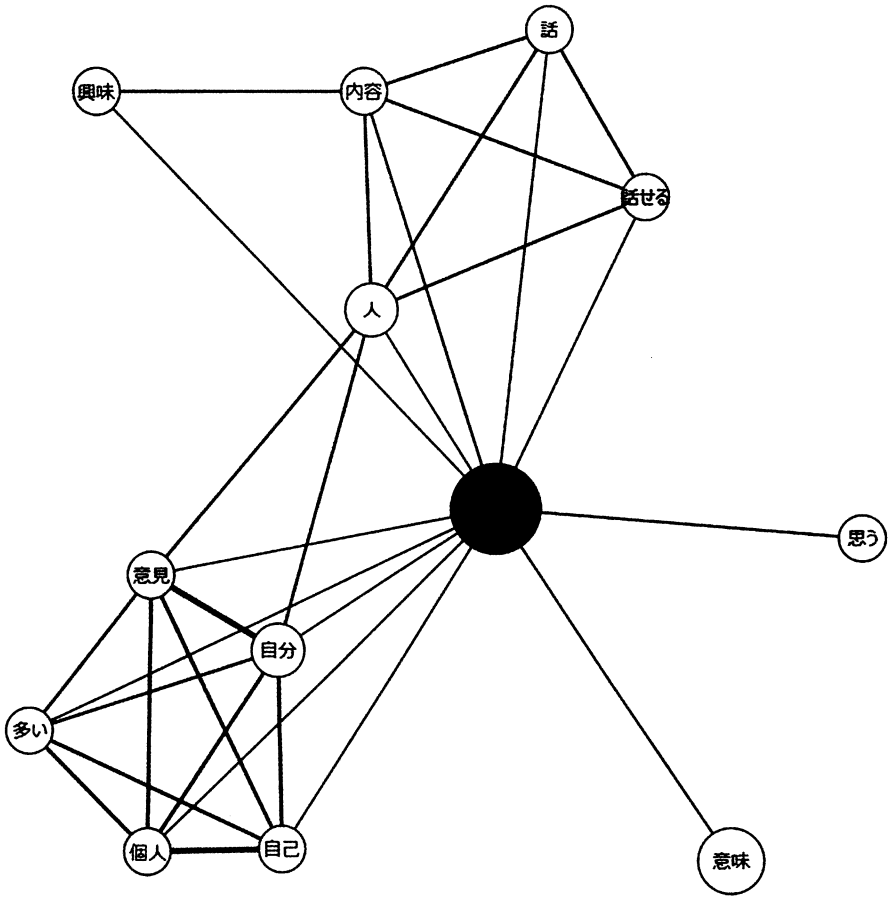

図 2　質問 5 の共起ネットワーク（Jaccard 係数が最も低い共起で 0.1）

回答数が少ないのでやや読み取りづらいが，元の記述にも立ち返ると，学生自身，すなわち「自分」や「自己」にとって「意味」があるとはいえない「授業」に対して不満が生じていることがうかがえる。ここで注意しないといけないのは，教員が授業に対して「意味」を見出していることが，学生が「意味」を見出していることに直結するわけではないこと，あるいは，教員が見出している「意味」と学生のそれとが必ずしも一致するわけではないことである。教員が授業に「意味」を見出していることは当然であろうが，それを学生と共有可能な形にすることや，共有を図ることが必要であることが示唆される。

3. 質問 13 の結果

質問 13 は，質問 12 で授業で得られた新たな発見や知見が「非常にあった」「それなりにあった」と答えた回答者に，その具体的内容を問うものである。総出現語数は 21498 語で，異なり語数は 1981 語であった。

表 5　質問 13 の頻出語（上位 150 語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
知る	246	学校	25	関わる	14
知識	145	活動	25	協力	14
子ども	123	実際	25	古典	14
自分	121	日本語	25	作成	14
知れる	78	必要	25	時代	14
指導	76	違い	24	重要	14
教育	75	憲法	24	少し	14
発見	72	聖書	24	他	14
学ぶ	65	特に	23	中国	14
書き方	63	キリスト教	22	聞く	14
人	63	ピアノ	22	法律	14
難しい	58	感じる	22	やり方	13
新しい	56	発表	22	コミュニケーション	13
分かる	56	学習	21	意見	13
学べる	53	先生	21	教員	13
楽しい	53	日本	21	教師	13
仕方	51	勉強	21	劇	13
授業	51	理解	21	調べる	13
新た	49	スポーツ	20	分野	13
表現	48	レジュメ	20	面白い	13
英語	47	作り方	20	グループ	12
図書館	47	使い方	20	音楽	12
方法	45	多い	20	会話	12
考え方	44	読む	20	経済	12
韓国	42	いろいろ	19	現状	12
様々	41	教える	19	現代	12
今	40	興味	19	視点	12
出来る	40	考え	19	深い	12
心理	40	子供	19	身	12
文学	40	書く	19	人間	12
思う	38	作品	18	世界	12
歴史	38	社会	18	背景	12
考える	35	文章	18	要領	12
詳しい	35	遊び	18	良い	12
大切	35	見方	17	話	12
違う	34	司書	17	レポート	11
たくさん	33	支援	17	演劇	11
内容	33	児童	17	歌	11
絵本	32	関係	16	絵	11
使う	32	現場	16	作る	11
問題	32	障害	16	習う	11

文化	31	対応	16	将来	11
実習	29	大変	16	情報	11
保育	29	得る	16	色	11
意味	28	発達	16	前	11
見る	28	関わり	15	弾く	11
言葉	27	技術	15	注意	11
単語	27	工夫	15	読み方	11
施設	26	増える	15	それぞれ	10
文法	26	話す	15	キリスト	10

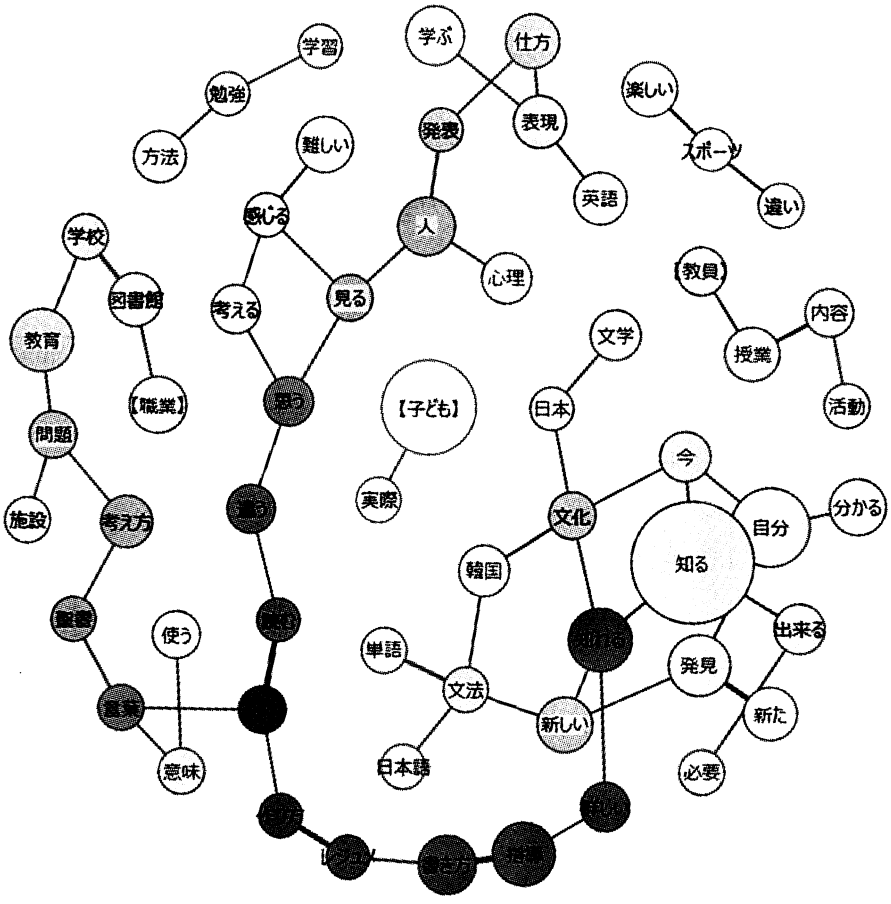

図 3　質問 13 の共起ネットワーク（Jaccard 係数が最も低い共起で 0.054）

以上のように，「知る」「知識」「知れる」「発見」「学ぶ」といった知的好奇心を満たすことが「新たな発見」につながったことを意味しているであろう単語や，「子ども」「指導」「教育」など，将来に直結する実践的な知識・技術の習得が「新たな発見」として位置づけられているであろうことがうかがえる。この点で質問 3 の結果とも重なるところが多い。

共起を見てみると図3のようになる。コーディングは，質問3と同様で，「将来」「職業」と「教師」の一部と「先生」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【職業】とし，「採用試験」「就活」「就職」を【就職】とし，「教授」「教師」の一部と「先生」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【教員】とし，「児童」「子ども」「幼児」「乳児」と「生徒」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【子ども】とした。結果は以下の通りである。

共起ネットワークを見てみると。新たな発見の内実は，先に述べたこととも重複するが，将来の特に【職業】につながる知識，それも特に，たとえば子ども学部であれば【子ども】との関わりについて学ぶような，実践的な知識・技術・視点の習得によって構成されていると考えられる。

4. 質問18の結果

質問18は，質問17で，授業の教育環境（教室・設備など）が「少し不満だった」「まったく不満だった」と答えた回答者に，その具体的内容を問うものである。総出現語数は1509語で，異なり語数は416語であった。

表6　質問18の頻出語（2回以上の出現）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
教室	22	分かる	4	壊れる	2
狭い	15	スピーカ	3	学校	2
授業	10	ホール	3	感じる	2
人数	10	マイク	3	見る	2
思う	9	鍵盤	3	後ろ	2
クーラー	7	言う	3	効く	2
広い	7	人	3	硬い	2
時間	7	生徒	3	行く	2
先生	7	前	3	事務	2
多い	7	東館	3	邪魔	2
ピアノ	6	必要	3	書く	2
遠い	6	話	3	少ない	2
机	6	もう少し	2	整備	2
見える	6	やる気	2	大きい	2
黒板	5	スマート	2	大切	2
使う	5	ホワイト	2	大変	2
暑い	5	ラケット	2	弾く	2
聞こえる	5	暗い	2	調子	2
パソコン	4	位置	2	調律	2
ボード	4	椅子	2	痛い	2
悪い	4	演習	2	頭	2
音	4	汚い	2	特に	2

寒い	4	分かる	4	難しい	2
時計	4	スピーカ	3	聞く	2
受ける	4	ホール	3	変える	2
少し	4	マイク	3	練習	2
声	4	鍵盤	3		
体育館	4	言う	3		

表6の通り，「教室」が「狭い」ことへの不満が最も多い。学生数が定員充足に近づいたことで，教室が相対的に狭小になっていることへの不満であろう。

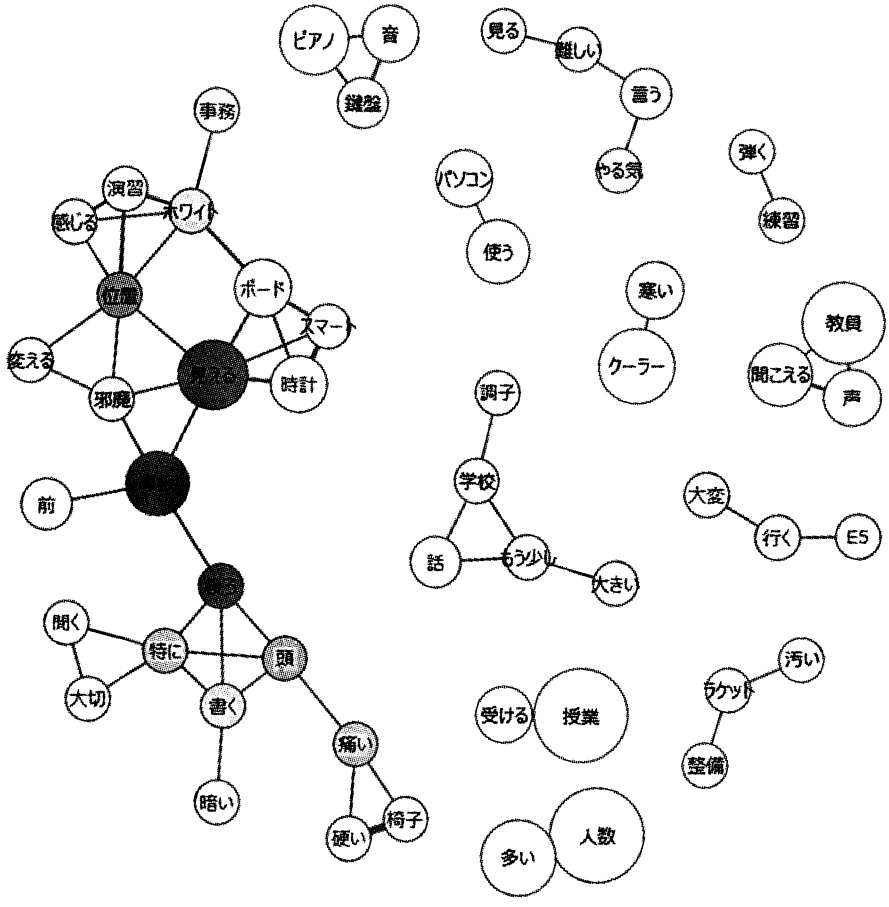

図4　質問18の共起ネットワーク（Jaccard係数が最も低い共起で0.275）

共起を見てみると，環境に対する要望としては，黒板が見えないこと，声の大きさ，ピアノの調整，空調の調整，人数管理，授業教材の管理などが多く挙げられていることがうかがえる。その中でも特に黒板の配置など，受講環境への要望が多いと思われる。

5. 質問 22 の結果

質問 22 は「この授業に対して全体的に感じたことや改善点を具体的に述べてください」と総体的な感想を求めたものである。したがって，否定的なものと肯定的なものが入り混じる。総出現語数は 40707 語で，異なり語数は 2654 語であった。

表 7　質問 22 の頻出語（上位 150 語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
特に	553	レポート	30	意味	17
授業	498	課題	30	覚える	17
思う	325	頑張る	30	経験	17
先生	312	大切	30	資料	17
楽しい	252	使う	29	深い	17
分かる	176	質問	29	聖書	17
良い	123	大変	29	伝わる	17
多い	112	いろいろ	28	熱意	17
難しい	105	生徒	28	保育	17
感じる	102	早い	28	方法	17
内容	95	改善	27	最後	16
学ぶ	88	非常	27	最初	16
時間	88	必要	27	大学	16
自分	84	将来	26	注意	16
説明	83	話す	26	入る	16
人	82	意見	25	スポーツ	15
理解	78	解説	25	学習	15
受ける	76	学生	25	教員	15
教える	74	進む	25	参考	15
話	72	知れる	25	字	15
勉強	70	無い	25	社会	15
知る	65	役に立つ	25	習う	15
テスト	64	声	24	出席	15
少し	63	前	24	少ない	15
指導	61	様々	24	詳しい	15
プリント	59	コミュニケーション	23	大きい	15
学べる	59	丁寧	23	変わる	15
書く	56	スピード	21	優しい	15
聞く	56	ピアノ	21	お願い	14
面白い	54	悪い	21	ビデオ	14
グループ	51	講義	21	マイク	14
もう少し	49	準備	21	学び	14
考える	49	機会	20	感じ	14
実際	48	教室	20	具体	14
実習	44	他	20	黒板	14

見る	43	体験	20	施設	14
出来る	42	キリスト教	19	色々	14
活動	40	嬉しい	19	人数	14
言う	40	教科書	19	速い	14
発表	39	全体	19	特記	14
たくさん	37	読む	19	板書	14
毎回	37	問題	19	予習	14
子ども	36	興味	18	研究	13
教育	35	苦手	18	言葉	13
英語	34	作る	18	参加	13
知識	32	終わる	18	持つ	13
本当に	32	身	18	親切	13
違う	31	雰囲気	18	調べる	13
今	31	練習	18	聞ける	13
出る	31	コード	17	役立つ	13

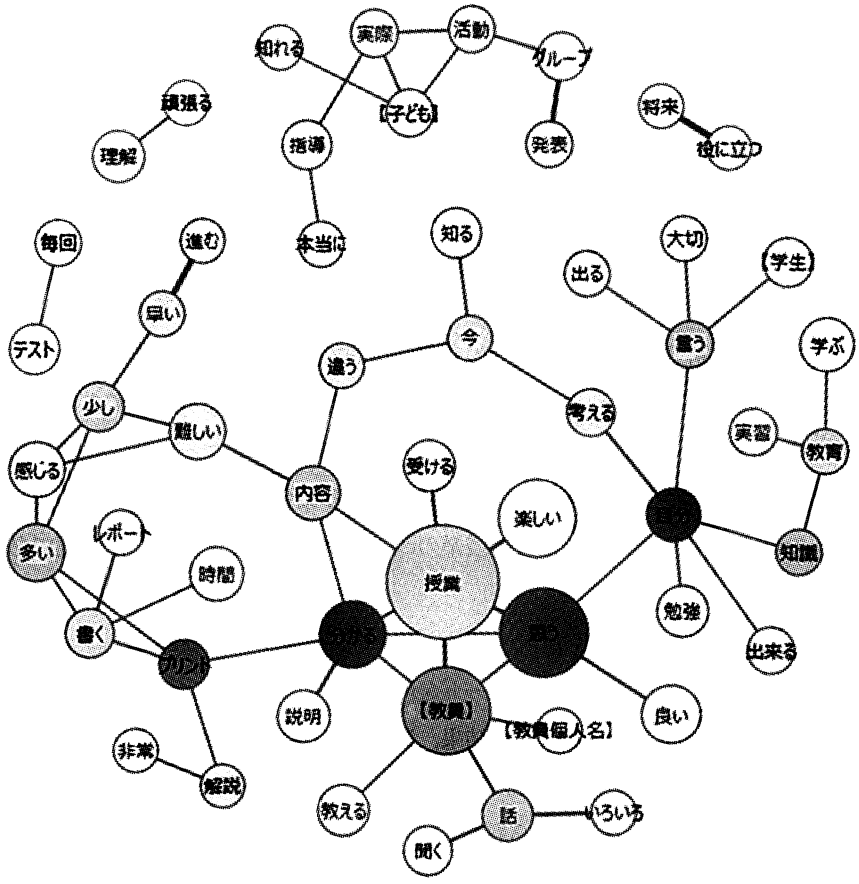

図 5　質問 22 の共起ネットワーク（Jaccard 係数が最も低い共起で 0.062）

ここでのコーディングは，「児童」「子ども」「幼児」「乳児」と「生徒」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【子ども】とし，「生徒」の一部（元の記述に立ち返って判断した）と「学生」を【学生】とし，「教授」「教師」の一部と「先生」の一部（元の記述に立ち返って判断した）を【教員】とし，また，教員の具体的な名前を【教員個人名】とした。

否定肯定取り混ぜての問いなので，図5だけで完全に読み取ることは難しいが，これまでの結果と同様に，将来につながってくるような実践的知識・技能に対する意見を提示している学生が多い。なお，図の向かって左に位置するネットワーク（「難しい」と「プリント」から左に向かって伸びていくネットワーク）はおそらく授業への不満点を述べている部分だと思われる。これは主に授業の進行に関する意見であるだろう。また，元の文章に立ち返ってみてみると，【教員】個々人との普段の関係が授業への評価を良い方向にも悪い方向にも左右することが推察された。小規模大学であるがゆえに本学は，教員と学生との距離が比較的近い状況があるが，教員との関係が既に良好であれば授業に対しても肯定的な評価が導かれやすいし，逆もまた存在するということであろう。

考察

以上の結果から導かれることは次の3点である。第1に授業の意味が学生と共有できていると学生も肯定的な姿勢を持って受講する可能性があること，第2に将来や職業につながる実践的な知識が提示される授業であると学生が認識していると肯定的な姿勢を持って受講する可能性があること，第3に授業外での学生と教員との関係も授業への評価を左右することである。

ただし，学生の評価が絶対的に正しいことばかりではないのは事実であろうし，授業評価はあくまでも手段であり，評価を上げることそのものが目的ではないのも事実である。ここは忘れてはなるまい。だが，それでも，教員側が自身の授業に付与している意味や意義をきちんと学生に伝達し，それを共有すること，また，伝達・共有のためのコミュニケーションから信頼関係を相互に結んでいくことが，学生が授業から新たな発見を得る機会を増大するのであろうこともまた事実である。ここを押さえながら，自身の授業の改善を常に図っていくことが必要であろう。

総合考察

本研究では，学生による授業評価アンケートを用いて，授業満足度に影響を与える要因について，質的および量的な検討を行った。その結果，質的および量的な検討において共通する項目として，“実践的な知識などの新たな知見が獲得できること”“将来との関連づけなど授業の意味を実感できていること”の2つが挙げられた。大学教員の立場で考えると，授業を行う上では，学生にとって新たな知見を提供することや担当する授業が学生にとってどのような意義があるのかを自覚することは重要と言える。しかし，本研究の結果を踏まえると，教師が自覚しておくこ

とだけではなく，学生が将来との関連付けができるような働きかけも必要であることが示された。その他，授業の分かりやすさや授業外での関係も授業満足度に影響を与えることが示唆された。授業改善においては，これらの点に留意することが望まれる。

今後の課題としては，本アンケートの回答率を高める工夫が挙げられる。本研究で用いた本アンケートの回答率については，本学学生の約30％であった。そのため，大学全体の把握が十分にできていない可能性があり，結果の慎重な取り扱いが求められる。回答率が低かった一因として，回答への負担が考えらえる。学生は，1週間に受講する全ての授業で自由記述を含む22項目の質問に回答することになる。そのため，例えば質問数を減らすなどの回答への負担を軽減する工夫が求められる。

また，学年や学科ごとに授業満足度に与える影響が異なることも考えられ，学年別および学科別の検討が必要である。さらに，本研究は授業満足度に関する検討であったが，授業の習熟度に関する評価を行うことも重要であると考えられる。そのため，習熟度の高い授業に影響を与える要因の検討，および授業の習熟度と授業満足度の関連などを検討することが求められる。

1　出現数が多いほど円が大きく、共起関係が強いほど線が太い。円の色が濃いほどネットワークの中心に位置することを意味する。【】で括られた語は、同様の意味を持つ語をまとめたコード。

引用文献

有本章（2005）．大学教授職とFD　東信堂.

中央教育審議会（2005）．我が国の高等教育の将来像（答申）.

樋口耕一（2015）．KH Coder　<http://khc.sourceforge.net/>（2015年11月18日）.

絹川正吉・舘昭（編著）（2004）．学士課程教育の改革　東信堂.